国際部用日本語教科書編纂の基本方針

岡野喜美子

国際部では，昨年10月から基礎準備を始め，現在，3人の非常勤講師[1]とともに初級から初中級[2]にかけての日本語教科書を作りつつある。作りつつあるというとかなり作業として進んでいる観があるが，正しくは作り始めたところとでもいうべきであろう。この「作る」段階に来て，私たちはいくつもの困難と解決すべき課題に直面している。

教科書作りは，つねに気の遠くなるような作業と困難を伴うものであるが，今回感じる困難や解決しなければならない課題は，以前に教科書を作ったときのものとはかなり違う種類のものである。

これは，オーディオ・リンガル方式に基づくシラバス，授業の形態，教授法を信じて教科書を作る努力をした，以前の経験に比べ，今回は，はじめから試行錯誤の中に光明を見いだそうというおぼつかないスタートを切っているからにほかならない。目指す先はただひとつ，国際部の学生に合った「伝達能力のつく教育の実現」であるが，さしあたってどの小道に入ってどの方角を目指せばいいのか決めかねている旅人にも似た思いで模索を始めている[3]。

以下，教科書作成に関して模索中の課題も含めて次の順序で述べる。

1. なぜ今，国際部向け教科書を作るのか
2. どういう教科書を作ろうとしているのか
3. 教授法などとの関わり
4. 結び

1. 教科書編纂の必要

多くの日本語教育機関でいろいろな教科書が作られているが，それは，それぞれの機関の学生の必要に合わせた「それぞれの教育」が求められるからである[4]。国際部で教科書を作る理由も国際部の留学生に合った教育の必要が求められているからである。国際部の留学生という特定の学習者を対象とする教育が必要であると考える根拠は，「講座日本語」第24分冊の拙稿「国際部の初級日本語教育」[5] に述べたので，ここでは簡単に触れる程度にしたい。

近年，日本語教育の方法論の研究が進んできており，教師同士の会話でも学習者の多様化，特定のニーズといった言葉をよく耳にするようになってきた。これらの用語を使うまでもなく，国際部の学生には創設以来一貫して特色があり，それに対応する教育の必要があるということはそこで教える教師の共通の認識であった。つまり，最近になって急に学生たちが変わってきたためそれに合う教育が必要になったというのではない。センターの留学生などとの比較においては，学生のほとんどを占めるアメリカ人留学生の口頭伝達表現と実用性への強い志向，学習内容・題目への関心・無関心の差の大きさ，口頭での伝達意欲に比べ読み書きによる伝達意欲の低いこと[6]，などの傾向やホームステイという生活形態は以前からほとんど変わらない。国際部の初期のころとの違いといえば，どこの大学にも見られる傾向だと思われるが，ビジネス関係の専攻の学生が相対的に増えていること，日本語学習歴のある学生が増えたことなどである。

上に述べたような特色をもつ国際部学生に適した日本語教育の必要性はこれまで何年にもわたりたびたび論じられてきた[7]わけであるが，今日まで実現に向けて動き出せる内外の条件がなかったというのが実情である。諸条件が整った昨年，私たちはようやく国際部用の教科書作成の準備に入ることができたのである。(この準備の中には，学習者および学習者周辺にたいして行ったニーズ調査[8]もあったことを付け加えておく。)

2. 教科書編纂の基本方針

内外の日本語教科書，これまでに使用経験のある日本語教科書，副教材などの分析と使用結果，国際部の学生に共通の弱点の分析から，「国際部学生用日本語教科書」(仮題)(以下「国際部教科書」と略す)の構成と内容を，次のような考えに基づいて決めた。

話しことばと書きことばは徹底して分離したほうがいいのではないか

会話も文章もより自然なものにするために話しことばと書きことばの文法・表現は分けて考えたほうがいいのではないか

話しことば(会話)で文字(漢字)を教えようとしないほうがいいのではないか

各課の会話の目標——機能・場面など——を簡潔にしたほうが学習しやすく，到達感があるのではないか

会話教材を，理解できればいいもの (receptive) と使えるようにしたいもの (productive) の2つのタイプにはっきり分けたほうがいいのではないか

ローマ字は大学生用の教科書としては使用しないほうがいいのではないか

1) 構成と内容

「国際部教科書」は，大きく分けて会話教材と読み物教材の2冊とする。作成は同時に行う。

A 会話の本

会話の本は，徹底して会話の力——話す・聞く技能——を伸ばすことを目的として作成する。したがって，会話はできるだけ自然なもの[9]にする。日本に住む学生たちが学校生活，社会生活，家庭生活(ホームステイ)で必要とする表現力，聴解力をつけることを目指す。

□各課の構成

- 会話
- 文型 / 表現意図

- 解説
- 単語
- 練習1(基礎的なドリル)
- 練習2(会話ドリル)
- タスク，ロールプレイなど
- 聞き取り

練習(ドリル)は教室用というより予復習用である。教室内の練習としてはさまざまなタスクやロールプレイをさせて，基礎的，応用的な練習が行えるようにする。

国際部に留学している学生たちがホームステイしている言語生活環境を考え，聴解力の訓練を積極的に行う。LL 教室がないこともあって，これまでどちらかというと時間があれば行う程度であった聞く練習を，聞き取り教材を充実させることで十分行うようにする。いろいろな話し方――くだけた会話，丁寧な会話――にも早くから慣れさせる。

B　読み物の本

文字(ひらがな，カタカナ，漢字)の導入はこの読み物で行う。たとえ初級であっても，「読む力，書く力」の教育は単に文字力にとどまらず，総合的な読み書き能力，すなわち，文字力，読解力，文章力のすべてを考慮に入れるべきである。非漢字系の学生の場合，漢字がネックになって読解力，文章力がつきにくいが，これには2通りの場合がある。第1は，知っている漢字の数が少なすぎて読み物らしいものを読まず，会話教材を読むことに終わりがちな場合，第2はかなりの漢字数を学習しながらそれらの漢字を使った適当な読み物がないため，学習した漢字が単なる知識にとどまり，結果的に読む力がつかない場合である。コミュニケーションの力というととかく会話教材の中だけでとらえられがちであるが，初級後期から中級にかけて，語彙，トピック，表現のどれをとっても読み書きの力に裏打ちされない話す力には限界があって，これが伸び悩みの原因となる。この意味でも学習漢字と読み物，作文とを密接に関係づけて漢字と読み書き

への興味を増し，能力を高めるための工夫をすることが必要であろう。

この読み物の本は，最初の課のほうは，会話の本の内容，文法項目などに関連づけて並行して使えるようにすることを考えているが，後のほうになると関連づけられないものが増えてくるはずである。むしろ，途中からは会話教材を離れてトピック中心，構文中心，表現中心で読み物の課を作ることを積極的に考えたい。

□各課の構成

- 漢字の導入——意味，音訓，書き順，熟語
- 漢字交じりで書かれた文(文章)の理解と読み方練習
- 漢字を使って文(文章)を書く練習
- 話しことば——くだけた会話口調，助詞の脱落，省略など——と書きことばの違いを意識させ，きちんとした文を書くようにするための構文練習[10]
- 会話の本から抜けがちな文法項目[10]，語彙，文章表現などを盛り込んだ読み物
- 大学生にふさわしい知的で興味ある読み物——ディスカッションやディベイト，スピーチ，作文のテーマになるもの

2) 作り方

以前，オーディオ・リンガル・アプローチの考えに基づく初級教科書[11]を作ったとき，教科書の骨格はだいたい次のような順序で作られた。

a 文型の選択

初級文型と思われる項目の洗い出しと選択

b 文型の配列

「易から難へ」の原則

単純な形・単文から複雑な形・複文へ

c 文型(形)と結びつく表現意図の洗い出し。「マショウ」形から「一緒に～ましょうか」「わたしが～ましょうか」「～ましょう！」などへ

d 文型と結びつき，かつ学習者の必要に近いと思われる場面や話題，

人物の設定

e　会話の書き下ろし

f　ドリル作成

g　解説(ノート)作成

文型の形，表現の説明，表現意図，伝達機能などの説明

h　単　語

i　漢字の選択・配分

会話，ドリル中の漢字の洗い出し

j　場面設定による応用会話の勧め

k　練習問題

今回，「国際部教科書」を作るにあたって，上のような教科書の作り方とは異なる方式をとった。すなわち，文法項目(文法的なシラバス)を考える前にまず表現意図・機能を選び出すことを行った。そして，それらに合う表現をできるかぎり具体的に書き出した[12]。

表現意図・機能から始めた理由は，もちろんそれを中心に盛り込んだ教科書を作りたかったからであるが，もうひとつは初級文型の洗い出しについてはいつでも(編著に携わる4人のうち)だれでもできるが，初級の表現意図・機能になると必ずしも4人が共通の理解に立っているとは限らないと思ったからである。このやり方は少なくとも教科書作成の視点を構文，文型からより機能のほうに向けるうえで，また機能中心で集めたリストからどういう重要な構文・文法項目が抜けるのかを体験できたことで，大いに効果があった。参考までに，実際の過程を順に書いておく。

- 依頼(する・受ける・断る)，相談，挨拶などの表現意図・機能にかかわる項目のリストアップと検討
- 上で十分，あるいはまったく扱われなかった項目——文末表現，副詞節，従属節，コソアド，副詞，自他動詞，テンス・アスペクトなど——のリストアップと検討
- 助詞のリストアップ

これらは何十ページにも及び，シラバス作成のもとになる項目であるが，このままでは単なる項目リストにすぎない。これをどういうシラバスに編成するか，実は2月現在まだ検討中である。実際にいくつかの課を試作し作成に着手したわけであるが，大きな課題のひとつはこのシラバス作りである。今後ニーズ調査の結果も参考にして初級から初中級に及ぶシラバスを作りあげていかなければならない。試行錯誤と模索を続ける中で議論を重ね，課題を解決していくことになろうが，私の予測では，試作期間中の経験から単一のシラバスのもとにすべての課を作ることはしない(できない)であろうということである。

これについては，シラバスが確定し教科書編纂が軌道に乗った時期，あるいは試用版ができた段階で発表することにしたい。

3. 教授法などとの関わり

今，国際部の日本語教育のための教科書を作るにあたって，教科書が変わりさえすればそれでよいという発想はない。しかし，本稿では教科書のことのみを取り上げ，教授法やコース全体に触れなかった。カリキュラムやコースの大きな枠組みがまだ確定できない段階で，教科書を作り始めることの愚を指摘されるかもしれない。これまでも，どちらかというと，教育にたずさわるわれわれの関心の中心はどういう教科書を使用するかにあり，教授法を含むカリキュラム全体への関心は薄かったように思うが，それをよしとしているわけではない。たとえば，教科書で扱うはずのタスクひとつとっても「どう教えるか」に直接結びつくものであるだけに，教科書の進行と同時に考えを進めていく必要があり，これも大きな課題として残っている。

国際部にとって，コミュニカティブ・アプローチに基づく教授法，TPRなど学習効果を高めるための教授法の(採用を前提とした)研究はこれからである。実際に国際部で考えられる教授法はいくつかを組み合わせたものになるであろうが，今後皆で勉強していきたいと考えている。

4. 結　び

いったん教科書ができると，それは好むと好まざるとにかかわりなく教育の固定化につながりやすい。必要に合った固定化であればその教育機関の長所となろうが，必要に合わず固定化している場合には動脈硬化である。

もし，柔軟な使用法を可能にし動脈硬化を起こさない教科書を実現させることができるとすれば，それはかなりの成功である。そのときどきの条件——必要性，使われるレベル，使用目的など——によって使い方に工夫ができる教科書こそ今求められる教科書の姿なのではないか，と私は考える。さらに，教科書を，軽薄でなく軽やかな融通のきく会話教材と，重苦しくなく重厚な読み物教材という2本立てとしていくことではじめて「国際部学生用日本語教科書」を今作る意味があると思う。

最後に，会話教科書を作るうえで，今だに抱えたままの「課題」を書き出して本稿を終わることにする。

初級会話における「自然さ」とは何だろう。「普通の談話的自然さ」と「機能上，表現上，語彙的，場面的に不自然でないこと」とは?

自然ならいい規範(見本)なのだろうか。自然な会話にともなって数多くの構文や機能が同時に現われるが，学習に支障をきたさないものなのだろうか。

初歩のレベルにおいて，ある機能，表現，場面への必要(ニーズ)の大きさは果たしてそれらの構造的な，あるいは発音上の難しさを超えて習得を容易にするものなのだろうか。

[注]

1) 大塚純子，宮崎寿子，長谷川ユリの3氏。

2) 「初中級」というレベルについては，「日本語運用力養成問題集——初中級用——」(大塚純子，川口さち子，浜由美子，および筆者の共著)の序で監修者寺村秀夫氏が触れておられる。国際部の場合，この段階を無視して初級終了者の中級への移行は考えにくい。このレベルとそこでの学習については別稿で論じたい。

3) 折しも，昨年の「日本語学」11月号に掲載された市川保子氏の論文

「コミュニカティブ・アプローチの中での文法のあり方——新教科書作成を通して——」は，筑波大学留学生教育センターで「コミュニカティブ・アプローチを目指して」作成している教科書に関し，談話と構文力・文法についての問題提起を行っている。先行するコミュニカティブ・アプローチによる初級教科書がない中での，意欲的な試みと模索の様子がうかがわれる。

4) 「日本語学習者の多様性，ニーズ」などについては田中望氏「日本語教育の方法——コース・デザインの実際——」および岡崎敏雄氏「日本語教育の教材」などにくわしい。

5) 岡野喜美子「国際部の初級日本語教育——現状と将来への展望——」『講座日本語』第24分冊，早稲田大学日本語研究教育センター，1989

6) 国際部の中だけで考えれば，以前より読み書きや漢字に関心のある学生の比率は少しずつではあるが増えているように思う。しかし，依然アメリカ人学生の会話力と読み書きの力の差は大きく，これが同じ非漢字系であってもヨーロッパ系の学生との大きな違いとなっている。

7) 国際部の日本語教育については注5の拙稿に北条淳子氏，川本喬氏，上山民栄氏によって書かれた先行の論文が紹介されている。

8) このニーズ調査は，筆者と長田紀子，シェック陽子両非常勤講師が行っている共同研究に基づくもので，第1回は1989年11月末から12月末にかけて行われた。同じ被調査者を対象に別の角度から本年6月にまた実施する予定である。

9) 「できるだけ自然なもの」としたのは「完全に自然なもの」が何か，がわからないからである。「自然さ」への考慮が足りなかったために不自然を許した教科書に対する反省として「自然さ」を求める気持ちは強い。一方，初級教材(すなわち，規範)として「自然な会話」はこれだ，と言えるものはなかなか見えてこない。模索中の課題として4の結びでもこの点に触れた。

10) 構文力や正確さは書くことでしかつかないのではないか。自然な，しかし断片的な会話に現われにくい構文は同時に学習させる読み書きの中でこそきちんと教えられるべきであると考える。

11) Learn Japanese (Young & Nakajima-Okano)

12) 不完全なものではあるが，参考例として「依頼」を取り上げる。

【依頼する】

～テクレマセンカ / テクダサイマセンカ(テ / ナイデ)

テモラエマセンカ / テイタダケマセンカ

～テクレナイカ / テクレ

～テクダサイ

～テチョウダイ / テ

～ヲオ願イシマス

～タインデスガ / テモライタインデスガ / テホシインデスガ(ケド)

～トウレシインデスガ / トアリガタインデスガ

チョット...ンデスガ

ヨカッタラ / ヨロシカッタラ

アノウ　チョット

悪イ(ン)デスケド

スミマセンガ

【受ける】

ア，イイデスヨ / ドウゾ / イイデスケド

ワカリマシタ / ア，ソウデスカ，スミマセン　ハイ，エエ

【断る】

ア，チョット...ンデスケド / ンデ / ア，チョット(でき)ナインデスケド

ア，(これ，借りた)ンデス